御所まち伝建通信

文化財課 ☎60・1608

第9回 おもてなし文化と離れ座敷

江戸時代には、「一生に一度はお伊勢参り」と言われるほど伊勢参宮が流行しました。御蔭年（伊勢神宮の遷宮の翌年）になると、老若男女、貴賤貧富を問わず集団で伊勢参宮をする「おかげ参り」が起こります。その伊勢への道すがら、各地の人々が参詣者の宿泊や食事の世話をする行為を施行と言います。

文政13年（1830）のおかげ参りでは、約1万人の参詣者に対し御所まちの人々が施行をしたそうです。御所まちに残されている古文書には、宿泊や食事だけでなく風呂の施行までしたと記されています。この御所まちのおもてなしは評判だったようで、御所まちを訪れた参詣者たちは感謝を込めたたくさんの和歌を贈りました。

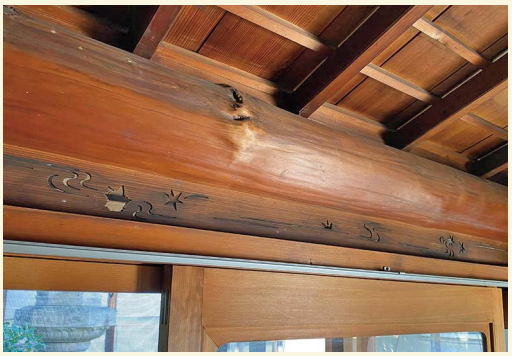
古文書以外にも、おもてなし文化の名残を感じることができます。それが主屋の別棟に設けられた「離れ座敷」です。

一般的に座敷は、主屋の中に客間として作るもので、わざわざ別棟を設けることはありません。それが御所まちには当たり前のように、離れ座敷が作られています。立派な離れ座敷を作ることができるほど、江戸時代の御所まちは豊かであったと想像されます。

離れ座敷の入口に架けられた反り橋

御所まちの人々は、お客さんを招く離れ座敷にさまざまな趣向を凝らしました。例えば、離れ座敷に向かう渡り廊下に架けられた反り橋は、入口からお客さんの好奇心を掻き立てようという心意気を感じさせます。また、自然をモチーフにした窓の形や彫刻は、部屋の中でも自然を感じてもらいたいという気持ちの表れです。このように、さまざまな工夫を施した一番良い部屋にお客さんを招いて楽しんでもらおうという、御所まちの人々のおもてなし精神が表れた場所が、まさに離れ座敷だったのです。

建物の価値は、その古さや伝統的な建築技法にのみあるのではなく、そこに暮らした人々の生活や想いを知ることができるところにもあります。この魅力を後世に伝えていくことにも、建物を守る意味があるのではないでしょうか。



紅葉柄の彫刻

梅柄の窓

床の間